
あたしは天下のオジヨー様！

葵

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

あたしは天下のオジヨー様！

【Nコード】

N9852Z

【作者名】

葵

【あらすじ】

あたし、楠木日向！

ちよーっと風紀の悪い学校を仕切ってる
世間一般に不良ってヤツ。

あ、そこまでガラ悪くないから。
むしろ正義のヒーローだから！

そんなあたしだけど、

ひよんなことから世界屈指のオジヨ一様になることに！

ちよつと、ちよつと、ちよつと！

あたしの生活どうなっちゃうの？！

第1話

いつやほー！

はじめましてー！

あたしくすのきひなた楠木日向！

中学から徒歩5分に住んでる14歳。
ピッチピチの14歳！

あ、2回言っちゃった。

とにかく今日から中学3年生！

もう気合い十分だよ！

制服バシッときまってるし、気分上がる！

憧れの中3！

ついに、あたしが川中かわちゅうの女王に！

説明がまだだったね。

気分がよすぎて取り乱しちゃった。

川中っていうのはあたしが通う川崎中学校のこと。

不良が集まったご近所でも評判の中学校。

奥さまの井戸端会議でもよく出る話題。

ようするに不良の巣窟ってこと。

で、川中は代々中3の女子が支配することになってる。

なぜかはあたしにもわからない。

川中7不思議の1つ。

説明はされてない！

されてないから7不思議なのか……。

ちなみに15代まで続いてる。

歴史長いよね。

で、その支配者をこう呼ぶ。

女王。

第2話

でね、その由緒ある女王にあたしが選ばれたの！
すっごく嬉しい！

だってあの女王だもん！

テンション上がる！

今まで長かった……。

あたしが川中の支配者に！

ほんとダメ。

気分上がりすぎて死んじゃう。

学校着く前に死んじゃう。

あ、学校が見えてきた。

もうスキップだよ！

空までランニングできそうな気がしてきたよー。

空まで行っちゃったらそこは天国だけどね。

女王になる前に死んじゃうけどね。

ああ、校門が華のゲートに見えてくる！

ボロボロの校門にとりえ発見！

こういうときはいいよね！校門。

なんか廊下が赤い絨毯に見えてきた！

落書きだらけだけど、輝いて見える。

こんなに廊下って素敵だったのね！

「あ、こんにちは。楠木さん」

怖そうなお兄ちゃんに頭を下げられる。

ノンノン！

あたしは「女王様」なんだから！

楠木さんなんて呼ばれるのも今日で最後！

そう思うとにやけてくる。

ああ、こんなところでにやけてたら変人だわ！

メンツ台無しよ！

第3話

「もーすぐねえ」

時計が指すのは8時半。

あとちよつとで女王任命式！

え、授業始まるんじゃないのって？

不良が授業出てるわけないじゃない！
たまに出てるけどさ。

あたし、社会だけはできるんだよね。

あ、あと体育と音楽と。

ほかはダメダメだから出る気なし！

廊下を歩いてるとたくさんの人に頭を下げられる。

この崇拝度！

半端ないね。

ほんとにどっかの国の王女みたい！

ま、あたしは川中の王女なんだけどね。

いつもの音楽室へいく。

ここが不良のたまり場になってる。

あー、今日もたまってますね。

いつも以上にたまってますね。

あつたり前よね！

だってあたしの任命式なんだもの。

みーんな来るわよね。

来ないとうなるかわからないしー。

御苦労さま。

「はい、日向こつち来な」

卒業したはずの15代目王女が手招きをする。

任命は元女王がすることになってる。

わざわざ来てくれるんだよね。

ということは来年私がやらなきゃいけないのか。
面倒だな〜。

「はい」

私は壇にあがる。

このボブの茶髪の綺麗なお姉さんが15代目。

いつみても綺麗でうらやましい。

形のいい唇を開く。

「15代目女王、桜がこの者を16代目と認める」

パチパチパチ！

大きな拍手があがった。

みんなが祝福してくれている！

「あなたの名前は千影よ」

女王は名前では呼ばれることはない。

そんなの、恥になる。

だから、女王は新しい名をもらう。

この人も、桜という名ではない。

あたしの場合は千影。

千影……。

「あたしは千影！あたしが女王よ！」

皆が一斉に頭を下げる。

あたしは……16代目女王、千影よ！

第4話

「さっすが、ひな……千影様っ！百合感激です」
「そう？ありがとう」

このすっごくかわいい子は木下百合きのしたゆり。
すごく幼く見えるけど中2。

そしてこの子も不良。

まったくそう見えないんだよね。

背は低いし、声は高いし。

でも、不良。

「百合、一生千影様についていきます！」

「遠慮しときます」

一生ついてくるのは迷惑かも。

なぜかあたしにすっごくなついている。

謎だなあ。

ほんとにこれでいいのかな？

あたし、何度も同じことを思ってる。

百合、こんなにかわいいのに。

あたしについてきていいの？

間違ってる。

間違ってるよ。

百合は来ちゃいけない。

こっちの世界に来ちゃいけない。

前に聞いたことあったっけ。

不良でいいのって。

そしたら百合は言ったよね。

「これでいいんです」って。
笑ってた。

でも、すごく悲しそうだった。

問い詰めはしないけどさ。

不良には、いろいろあるから。

あたしだって例外じゃないし。

こういうことって聞いちゃいけないの。

不良の中の暗黙の了解だから。

第5話

「ただいまー」

一日終わって家に帰宅。

今日はずっと頭をペコペコ下げられた。

気持ちはいいけど、ずっとなんか変な感じがする。

初日なんだし、当たり前か。

今のうちに気に入らないうちで考えてるのかな。

あたしも昔はそうだったし。

女王のお気に入りには、特典いっぱいだからさ。

いろいろと便利。

次期女王も夢じゃなくなるし。

あたしは単純に桜様が好きだったから一緒にいたんだけどね。

「おかえり。さ、ご飯食べようか」

この男の人はあたしの叔父さん。

お父さんじゃなくて叔父さん。

お母さんの弟なの。

ちなもに名前は幸弘^{ゆきひろ}さん。

あたしのお母さんとお父さんは5年前に他界した。

不幸な火事だった。

隣の家の人の寝たばこが原因で、あたしの家に燃え移った。

あたしは一人になっちゃった。

そんなときに幸弘叔父さんがあたしを引き取ってくれた。

幸弘叔父さんはまだ結婚してないから、あたしと2人暮らし。

これはこれで満足してる。

叔父さんはあたしが不良なのを知ってる。
知ってるけど止めない。

止められてもやめる気はないけどさ。
なんでだろーね。

「あ、きんぴらごぼうおいしい！」

「この、ほうれん草もおいしいよ」

見ての通り、裕福とはお世辞にも言えない。

だけど、あたしはこれがいいの。

だって、楽しいもん。

こんなご飯でもおいしいもん。

……すくなくとも、1人になることはないから。

1人ぼっちはもうやだ。

誰かと一緒に暮らしたい。

だからあたしは大満足。

第6話

「おはよう。幸弘叔父さん」

「ああ、おはよう。ひなちゃん」

今日は余裕をもって起きることができた。

いつもは遅刻寸前。

授業にじゃないよ。音楽室に。

だから朝ドタバタするのにも幸弘叔父さんは慣れてる。

だけど今日は6時半に起きたから、びっくりしてる。

もー、あたしをなんだと思ってるのよ！

「髪、ボサボサだよ。とかしておいで」

近くにおいてある手鏡であたしの現状を確認。

あー、これはひどい。

惨劇のあとみたいになってる。

大きな鏡のある場所まで行って、ブラシで丁寧に髪をとかす。

胸下まである焦げ茶の髪がいつもみたいに戻っていく。

このままならなかったら、どうしようかと思った。

だって、これじゃ学校にも行けないよ！

あたしも一応髪を染めている。

金髪とかは嫌だから、焦げ茶を選んだ。

ほんとは黒いままでもよかったんだけど、やっぱりそれはね。

不良の威厳が台無しになっちゃうからって言われて染めたの。

それに、幸弘叔父さんの迷惑にはなりたくなかったし。

「いつてきまーす」

8時になったから家を出る。

家の前には百合。

「千影様！おはようございます」

「……」

……何でいるの？

あたし、別に約束してるわけじゃないし。

そもそも百合に住所教えたっけ？

この子、もしかしてストーカー？

「百合、ずっと待ってました」

何分待ってたの？

いつからいたの？！

聞けない……。

怖くて聞けない。

ていうか、待ち伏せの間違いじゃない？

「危険ですから、百合が行きと帰りを一緒にさせていただきます！」

「御遠慮させていただきます」

……この子、やっぱり危険だわ。

今すぐ警察に……！

「ちょ、ちょっと！」

「おじさん、お金あるんでしょ？お小遣いちょうだい」

近くの路地から話し声が聞こえてきた。

「百合、静かにして」

1人で話を進める百合をひとまず黙らせることに成功した。

「ほらー。いつあいあるじゃーん」

路地をそつと覗く。

そこには制服を着た2人の男子学生。

あの制服は……。

「紀乃川中ですね」

いつの間にか横にきていた百合があたしが答えを出す前に言った。

紀乃川中……。

あそこは、最悪の中学校。

あたしたちの学校と近いけど、仲はものすごく悪い。
何かあるたびに喧嘩してる。

だって、本当にあの中学校は最悪。
あたしが女王になったからにはあの学校はつぶしてやらないといけない。

そう考えてたけど、早くもあいつらと会うことになるなんて。
偶然にもほどがあるわ。

朝から騒動起こして。

ほんつとくに面倒な奴らだわ。

あたしがぎったんぎったんにしてやる。

「百合、下がってなさい」

「いえ、百合が行きます」

下がってなさいって言ったのに、百合はあの2人の前に躍り出た。
あの子……。あたしの命令を無視したわね。

「なんだあ、お前」

「こいつ、川中じゃん」

「へえー結構かわいいし」

「じゃ、お前、おれたちと来ないー？」

2人がケラケラ笑う。

ふざけんじゃないわよ。

第7話

あんたら、百合をなめてるんじゃないの？

こーんなにちっちゃくて、かわいくても、百合は喧嘩強いよ。馬鹿にするんじゃないわよ。

「朝からなんですか！？いちいちめんどくさいことをしてっ。

本当に暇人ですね。千影様と百合の邪魔をしないでください！」
最後の方に変なキーワードを見つけたけど置いておいて。

百合は2人の紀乃川中の男を睨みつける。

結構迫力あるんだよね、こういうときの百合って。

「おい、何生意気なこと言ってんだよ」

「後で泣いても知らないからな」

さっきのケラケラ笑いをやめて、百合に殴りかかる。

2人で殴るうなんて卑怯な奴だわ。

そんなの、百合のハンデにはならないけどね。

「その言葉、そっくりお返しします！」

百合は軽く体を右に傾け、相手の拳をよける。

クリーム色で、かたにつくかどうかぐらいの髪がさらっと揺れる。

こんなときでもかわいいね、百合は。

百合が鉄拳を顔面にたたきこむ。

2人はその場に崩れ落ちる。

馬鹿だなー。

あんたらみたいなのが百合にかなうはずがないじゃん。

「こりたら学校にさっさと戻ってください」

敵にまでその敬語を止めることはない。

でも、そんな丁寧な言葉づかいが怖い。

恐怖心をあおる。

「ひ、ひいー！」

2人は転がるように逃げて行った。

あ、本当に転んだ。
相当焦ってるわね。

「千影様！」

百合があたしのところまで戻ってくる。

「あたしの命令ぐらい守りなさい」

「すみません。あんな奴ら、百合で充分だと思ったので……」
しゅんとなる。

そんな顔されたら、許してしまいたくなる。
いつもいつもそう。

あたし、この顔に弱いだよ。

「いいわよ。そんなに気にする必要ないわ」

あたしはあの2人にかまれてた男の人に向って手を差し出した。

「大丈夫？」

「あ、ありがとう」

その人は、スーツを着ていて、会社員かなんかだと思う。
ひよろつとしていて、ふちなしの眼鏡をかけている。

「君、名前は？」

「聞くときはそっちから名乗りなさいよ」

失礼ね。

マナーぐらい守りなさい。

「私は渡辺幸助」
わたなべこうすけ

「あたしは千影」

男の人が？マークを頭に浮かべている。

当たり前よね。

千影、としか名乗ってないんだもん。

ふつうは楠木日向っていわないといけないんだけど。

でも、あたしは千影。

「あたしは千影」

もう一度言っ。

この名前を渡辺っていう男の頭に刻み込むように。

第8話

「千影様、百合はよるところがあるので先に行っててください」

学校に着いて、音楽室に向かう途中、百合はそう言うてにこやかにあたしの傍を去って行った。

嵐みたいな子ね。

あわただしいつたらないわ。

「はやく戻ってきなさいよー」

廊下をダッシュする百合に向って手を振った。

「はいー。すぐ戻りますから」

ぶんぶんと手を振り返す百合。

手、とれるわよ。

「あ、千影さん」

音楽室の前で待機する1人の不良。

昨日見たスキンヘッドの兄ちゃんじゃない。

名前は……。なんだっけ？

忘れちゃった。存在感あんまりないからなー。

「原田です。今日、新入生をつれてきましたんで」
原田だ。

思い出した。

あ、これじゃ思い出したに入らないかな。

「新入生かあ」

こっちも忘れてた。

新入生の選別やらないと。

うちの不良軍団に入れるかどうかの。

毎年恒例のイベント。

まあ、ほとんど入れちゃってるけど。

人数多いことにしたことはないしね。

だから、不良が増える一方。

え？卒業するからプラマイゼロだって？

そんなことないわよ。

あたしたち川崎中学は矢野高校っていう高校と

同盟みたいなのを組んでいる。

実質は主従関係みたいなんだけど。

だから、高校の方に中学の時の不良がにたまっていく。

高校じゃ、単位とらないと卒業できないからね。

そのせいで、どんどんたまっていくの。

「おい、千影さんがきたぞ！」

原田が音楽室の扉を開けた。

第9話

パチパチパチ。

昨日みたいな盛大な拍手が上がる。

あたしは胸を張って堂々と不良たちの前を通り過ぎ、用意されてる豪華なソファに座る。

まあ、豪華ってほどじゃないけど。

あたしたち不良にはもったいないかも。

お、みたことない顔がちらほら。

こいつらが新入生ね。

あー、今年は女が多いわ。

嬉しいけど、戦力にならないと無意味だしな。

「すみませーん」

甘い声がドアのほうから聞こえる。

この声は。

「百合ですー。遅くなりました」

やっぱり百合。

「で、後ろにいる子は？」

皆が警戒心いっぱいにならみつけているのは、百合の後ろに隠れてる、誰か。

不良……じゃなさそうね。

「百合の従妹の月夜つきよです。実はいろいろあって……」。

この子もうちに入れてほしいんです」

百合は申し訳なさそうにうだなれる。

そっちは後で聞くとして。

あたしが気になったのは別の方。

「月夜、あたしの隣に座りなさい」

こっちに来るように言ってみる。

ちらりと見えた髪がとってもきれいだっただうな子なのかな？

「は、はい！」

百合の背中からすつと出てくる。

なんだ、そこまで内気なわけじゃないのね。

「わ、私、宮部月夜みやへつきよといひます」

さらつと、腰まである金髪が揺れた。

染めてるんじゃないさそう。

あの金髪は自前ね。

少しウェーブのかかった髪。

すつごく綺麗。

そして、目。

透き通るような青。

海みたいに深いけれど、空みたいに鮮やか。

金髪に青い目。

この子、もしかして……。

「あなた、ハーフかなんか？」

近くまで来た月夜に尋ねてみる。

月夜はビクツと肩を震わせた。

「千影様！ハーフって言うのは禁句……」

「ハーフだなんて言わないでください！！」

百合の静止の声を上回るほどの大声であたしに怒鳴りつけた。

あ、あたし、何か変なこと言った？

第10話

びっくりした。

心臓が飛び出そうぐらいびっくりした。

だって、本当に大きな声だったんだもん。

さっきまでびくびくしてたのに、あんなに怒るなんて思わなかった。

あの子、不良とは何の関係もなさそう。

見たところ、だけど。

なのに不良のトップを怒鳴りつけるだなんて。

あー、びっくりした。

「おい、女！千影さんになんて口のききかたしてんだ」

そんな声が上がると、たくさんの場所から文句が飛んでくる。

さっきまでの勢いはどこへいったのやら。

月夜はまた百合の後ろへと戻って行ってしまった。

今度は百合もオロオロしてるし。

しょーがないわねー。

「うるさい！静かにしろ！」

あたしが一声あげると、シーンと静まった。

騒ぎ立てる奴は1人もいない。

王女の特権よね。

私情で黙らせたけどいいわよね、それぐらい。

「ちょっとこの子に聞きたいことがあるから。

あー、百合も来なさい」

2人を呼んで、あたしは音楽室からつながってる準備室の

ドアを開けた。ほこりっぽいな！。

ここは、女王しか入れない特別な部屋となってる。
結構広いし、片付いてる。

あとで、掃除しよう。

ここなら、いろいろ聞けるでしょう。

またなんかあったら困るし、百合も連れてきた。

これなら大丈夫でしょ。

月夜はやっぱり百合の後ろにいる。

尋常じゃないくらいにあたしを怖がってる。

あたし、変なことした？

あたし何もしてないよね？

なのに、怒鳴られるわ怖がられるわ。

なんだっていうのよ。

ちんぷんかんぷんよ。

第11話

「どっちでもいいわ。説明しなさい」

あたしは2人を交互に見た。

とにかく、説明をしてほしかった。

どうにかして理由を聞きたかった。

こんな状態の月夜に説明は無理。

わかってるけど一応言ってみる。

「百合が説明します」

やっぱり、百合がやることになった。

ま、これはどっちがしてくれても構わない。

話さえ聞ければね。

「最初に言おうと思ってたことも関係してきます。

千影様もわかってるでしょうが、月夜はハーフです。

父親は日本人ですが、母はヨーロッパ系なんです」

ヨーロッパ系か。

それで金髪に青い目なのね。

「月夜の母は月夜が7歳の時、借金を残して家を出たそうです」

その瞬間、月夜の顔が曇った。

嫌なんだ。この話をしてほしくないんだ。

だけでも、月夜は止めない。

「母がいないことや、金髪に青い目ということでも月夜は学校でいじめられてたんです」

ああ、もうだめだ。月夜は限界だ。
身体が震えてる。

思い出しちゃったんだね。

青い目がよどんでいる。

白い肌がどんどんと青ざめていく。

「それからいろいろあって……。

それで、ここでかくまってほしいんです」

なるほどね。

だいたい予想はできた。

金髪。

中学校に入ったらきつといじめはひどくなる。

当たり前だよな。

それで、川中で勢力をふるう不良軍団に入れてほしいってか。

ここに入ったら、いじめなんてなくなる。

あたしたちにはむかえはどうなるか知ってるし。

それに、川中を守ってるのはあたしたちだもの。

はむかう、なんて選択肢、この学校のやつらにはない。

「百合、いったん出て行きなさい」

あたしはひとまず百合を部屋から出す。

2人で話したかった。

だいたいのは聞いたし、席を外してもらおう。

「で、月夜。あんたまだいいことあるんじゃないの?」

さっきからあたしに訴えかけるような視線。

言わせて、あたしにはそう聞こえた。
まだ、この子は秘密をもってる。

「わ、私……」

月夜は小さな声で呟くように言った。

第12話

「私、百合姉に嘘……ついてます」

百合姉ゆりねえって百合のことよね？

確か、月夜って百合の従妹なんでしょ？

事情も知ってるっぽい百合に嘘をつく必要なんてあるの？

「母は、借金で夜逃げしたんじゃないんです」

でも、百合はそう言ってた。

違うなら、何なの？

「母は父からの暴力で……。それに耐えられなくて家から逃げたんです」

家庭内暴力ってこと？！

でも、お母さんがいなくなっただってことは……。

「次は私でした。母の次は、私でした」

ずっと制服の袖をまくった。

そこには痛々しい痣が。

「私、もう……」

月夜の頬に涙が伝う。

それは止まらない。

どんどんとあふれ出てくる。

プチッと何かが切れた。

ああ、堪忍袋の緒かな？

でも確かにプチッと聞こえた。

アニメや漫画みたいじゃない。

プチッだなんて。

あたしは、今かなり気分が悪い。

放っておけるわけじゃない。

こんな月夜、放っておけないじゃない。

そんなバカでアホでクズな父親、放っておけるわけじゃない。

「……あたしが」

「……？」

涙を流しながらもあたしの話に耳を傾ける。

次の言葉を待つ月夜。

「あたしが月夜を守る」

あたし、頭にきた。

あたしはそんなに賢くない。

ム力つくやつは殴り飛ばさないと気がすまない。

このままじゃ、月夜が壊れちゃう。

月夜は、もう駄目だ。

もう、我慢の限界まで来てる。

だから、あたしが殴ってやる。

月夜の気持ちをぶつけてやる！

「あ、りがと……ごさい、ます……」

泣きじゃくりながらもお礼を言う。

「ほら」

あたしはポケットからハンカチを出して渡す。

このまま泣いているわけにもいけない。

「ありがとう、ございます」

涙を拭いた月夜はにっこりと笑った。

「それでいい」

あたしも笑い返す。

そうよ、月夜には涙より笑顔のほうが似合う。

とってもかわいいよ、月夜。

第13話

それから1週間。

今年の春は大きな出来事がいくつもあった。

まず、不良でもない月夜が不良軍団に入ったこと。

かなりイヤそうだったが、みんな一応認めてくれた。
というか認めさせた。

はじめはすごくぎくしゃくしてたけど、今は違う。
かなり打ち解けて、すごろくとかで遊んでる。
よかったよかった。

月夜も楽しそうだし。

もちろん不良軍団もエンジョイしてる。

それから、不良軍団の中で月夜は勉強を教えたりしてる。
もう少し勉強はしないと、ということらしい。

わかりやすく、内容もおもしろい。

あたしもすっかりおしえてもらってる。

月夜、いい先生になれそう。

生徒は不良たちだけだね。

とっても平和な毎日。

暇だけど、すごく楽しい。

不良たちとばかり騒ぎするのがこんなに楽しいなんて。

全然気付かなかった。

最近はコントにハマってるの。

誰かが提案してコント大会。

あれ、ものすごく面白いイベントだね。
お腹痛くなっちゃった。

こーんな感じで毎日をごしてた。

これからはずっとこんな風に過ごしていくんだな。
そう思ってた。

だけど。

だけでも神様はそうはさせてくれなかった。

あたしの生活をめちゃくちゃにしたのは一通の手紙だった。

「たっだいまー」

あたしは帰宅して玄関で靴を脱いでいた。
でも、おかしい。

いつもは幸弘叔父さんが玄関まで来てくれるのに
出かけてるのになって思ったけど、違うみたい。
靴があるし。

それに車もあるし。

「変なのー」

あたしは部屋にバックを置いてリビングへ行く。
あ制服のままだけどいつか。

「たっだいまー」

あ、いたいた。

幸弘叔父さん、いるじゃないの。

ちよつと焦ったわ。

何かあったのかと思って焦ったわ。

完全にあたしの勘違い。

幸弘叔父さんは紙を見てうんうん唸っていた。

「おーい」

あたしが前にあるイスに座っても全く気付かない。
いったいどうしたのよ。

「ねえ、幸弘叔父さんってば」
肩をぶんぶん揺さぶる。

「ああ、ひなちゃん。おかえり」

さつきまで見てた紙をさつと隠した。

あたしに見られたらまずいの？

「さつき何見てたの？」

あたしが聞くと

「い、いや。何でもないよ」

と、うるたえだした。

もう、何だつて言うのよ。

「絶対見てた！みーせーてー！」

あたしは幸弘叔父さんから手紙をヒョイっと取り上げ
書かれている内容にばーと目を通す。

「ひ、ひなちゃん……」

あたしの目が途中で止まった。

「な、何よ、これ」

読まない方がいい、そう止める幸弘叔父さんを無視して読み続ける。

「……」

最後まで読んだ。

読んでしまった。

悪魔の手紙を。

何で？

あたし、何で見ちゃったの？

幸弘叔父さんが止めてくれたのに。

あたしの波乱の中3生活をこの1通の手紙が招いてしまった。

第14話

楠木 日向 様

いきなりのお手紙申し訳ございません。

あなたも戸惑っていることでしょう。

私は渡辺幸助。覚えていますか？

あのとき、あなたに助けてもらった者です。

私はあのときの恩返しがしたいと思い、お手紙を送りました。

私が勝手に調べさせてもらったところ、日向さんは
経済状況が良くないということが判明いたしました。

そこで提案です。私の家に養子としてきませんか？

日向さんさえよろしければ、私の家に養子としてきませんか？

嫌ならお断りください。

私は恩返しがしたいだけなのです。

嫌がることを強要はさせません。

いい返事をお待ちしています。

渡辺財閥社長 渡辺幸助

何よ、何よこれ。
どういふこと？

意味わかんないよ。

渡辺幸助。

この名前は覚えてる。

ちよつと前にあたしが紀乃川中のバカたちから助けた男。

あの、サラリーマンみたいな男。

渡辺財閥。

あたしみたいな不良でも知ってる大きな会社。
いろんなことをやってるし、有名。

あの人、渡辺財閥の社長だったの！？
まったくわからなかった……。

そんなこと、どうでもいい。
どうでもいいよ。

それより重要なこと。

……養子。

あたしがあの人の養子に……？
養子として引き取りたいって？

そんな……。

そんなの……嫌。

嫌だ。

あたし、このままがいい。

お金持ちの家になんて行きたくない。

あたし、普通な生活で言い。

貧乏でいいからこのままがいい！

「……ひなちゃん。僕もこんな話変だと思ったんだ。そしたら電話がかかってきてね。ここに書いてることおんなじこと言われたよ。いつのまにかこんな人とかかわってたんだね」

「ごめんなさい……」

「謝ることはないよ。僕は怒ってるんじゃないんだ。手紙にもあったけど、僕の家は貧乏だ。

いつもすれすれ。何とかやっていける状態なんだ。

ひなちゃんが行きたくないって言うなら、僕はそれでいいよ。ただね、やっぱり……」

「……」

幸弘叔父さんは、養子に入った方がいいと思うんだね。うん、構わないよ。

これが、幸弘叔父さんのためになるなら。言いたいことはわかるよ。

もう、私を養ってくことは難しいんだね。わかるよ。言わなくなつたってわかるよ。

だって、幸弘叔父さん顔にやすいもん。

でもね。でも本当は嫌なんだ。

普通でいたいんだ。

だけどこれが幸弘叔父さんへの恩返しになるなら。

あたしの気持ちを伝えられるなら。
ありがとう、のかわりになるなら。
あたし、それでも構わないよ。

第15話

「あたし、行くよ」

決めた。

あたしは養子に行く。

もう、普通に戻れなくても。

普通じゃなくなっても。

あたしは行くよ。

「……いいのかい？」

「いいよ。あたしは気にしてないから」

気にしてなんかないよ。

別にいいよ。

むしろ、感謝してるよ。

今までありがとうって。

次はあたしの番。

あたしがお礼をしなきゃいけない。

だから、行くよ。

「わかってるよ。言いたいことはわかってるよ」
「……」

幸弘叔父さんは何もしゃべらない。

何も言わなくてもわかってる。

あたし、わかってるから。

だから大丈夫だよ。

あたしは平気だよ。

心配しないでよ。

あたしは女王よ！

……そうだ。

あたしは女王だ。

川中の皆をどうすればいいの？

どうしよう。

養子となったら転校しないといけないよね。

じゃあ、川中はどうなるの？

女王はどうなるの？

あたしはどうすればいいの？

だけど、あたしは行かなきゃ。

優先しなきゃいけないことがあるから。

ごめんね。

あなたたちは大事だけど、1番じゃない。

もう、はっきりと順位がついてしまってるから。

あたしがやらないといけないことじゃないから。

変わりはいくらでもいるから。

だからごめんね

第16話

「これでほとんど終わったかな」

あたしは部屋をぐるっと見回した。

あたしの大切なものを机から取り出してダンボールに入れた。もちろん、全部持って行きたいけど、迷惑になりそうだし。だから、選ぶことにした。

あたしのアクセサリー、あたしのぬいぐるみ。ダンボールにそっと詰め込んだ。

少し前に、渡辺さんに電話した。

渡辺って呼び捨てにするのもどうかと思って「さん」をつけることにした。

これならいいよね。

手紙の中には名刺みたいなのが挟んであって、電話番号もあった。それを見て電話をかけた。

YESの返事をするために。

その次の日、渡辺さんが訪ねてきた。

細かい説明とかするために。

あたしが養子に行くのは1週間後になった。

1か月ぐらいがいいのでは、と渡辺さんは言ったけど却下。だって決心が鈍る。

行きたくないって思ってしまう。

だから、早いうちに行きたかった。

あたしが選んだのは、1週間だった。

残り、3日。

あと3日であたしはこの街からいなくなる。
残されたのは3日間だけ。

さあ、そろそろ学校に行かないと。

また遅刻しちゃう。

あの鬼センサーもみられなくなるのか……。

わざと遅刻しちゃおうかな。

悔いのないようにしとかなきゃ。

時間は巻き戻せないんだから。

そういえば、百合にあのペン返しておかなきゃ。

月夜にあげようと思って買った髪留め、渡していない。

やることがいっぱいあるね。

今のうちにおわらさないと。

あとは何が残ってるかな？

第17話

「千影様。最近元気がないです。どうなさったんですか？」

昼休憩、外で幸弘叔父さんが作ってくれたお弁当をつついている真つ最中、百合は唐突に聞いてきた。

「そんなことないわよ」

あたしは笑ってみた。

それでも百合は心配そうな顔をする。

「私もそう思います」

あたしの右でサンドイッチにかぶりついていた月夜も口を出す。

あらやだ。なんでわかったの？
もしか、バレバレ？！

エスパーか。

エスパーなのか？！

「違うわよ。最近寝不足なだけ」

あたしは卵焼きを口に放り込んだ。
幸弘叔父さん特製の卵焼き。

これも食べられなくなるのかあ。
残念だな。

あたしはみんなにはギリギリまで言わないことにした。
転校のこと。

結局あたしはお嬢様学校「桜ヶ丘女子中学校」っていつとくに
転校することになった。

みんな知ってる有名な学校。

春だし、区切りもまあまあいいしね。

わかってはいたけど、息苦しそうなところ。

ここがいいな。

ここにいたいな。

でも、それは叶わないんだよね。

あたしが決めたことなのに。
どうしてこんなにも苦しくなるの？

第18話

「これ、どうぞ。髪止めのお返しです」

月夜は紙袋をあたしに差し出した。

ああ、前にあたしがプレゼントしたやつか。

今日は付けてないけど、いつもつけてきてくれる。

「開けていい？」

月夜がうなずいたのを確認して、紙袋を開ける。

丁寧にシールをはがして中身を取り出す。

この感触は……。

「ハンカチ？」

予想通り。ハンカチだった。

紫色で、端には黒猫のシルエットの刺？。

白いレースがついたかわいいハンカチ。

月夜らしい趣味……。

でも、すっごく嬉しい！

「ありがとう！月夜。大事にするわ」

「私も髪留め、大切に使っています」

月夜はにっこり笑う。

ホント、美人だな。

うらやましすぎるんだけど。

百合も百合でめっちゃくちゃかわいいし。

従姉妹って似るんだねえ。

仲もいいみたいだし。

いいなあ。

従姉妹って。

「そろそろ、音楽室へ行きましょうか」

「そうね」

百合は弁当箱を風呂敷で包み立ち上がった。

月夜もたって制服をただす。

「私は放課後行きますね」

百合とあたしは音楽室へ。

月夜は自分の教室へと向かった。

月夜もさすがに授業をさぼるのはいやらしい。

ま、不良ってわけじゃないしね。

そう考えるのも当たり前か。

音楽しての中はやっぱ煙くさい。

換気ぐらいしなさいよ。

「あ、すみません」

あたしが窓を開けていると、原田が手伝ってくれた。
原田は気がきくし、いいやつだと思う。

「もうすぐかあ」

あたしは窓から身を乗り出して呟く。

……もうすぐ、だ。

どうやって切り出そうか。

転校のこと。

それとも、言わずに行こうか。

何も言わずに行こうか。

次の日からドロン。

それもいいかもね。

言わなくてもいいんだし。

あたしにはそれが一番いいような気さえしてきた。

そう、何も言わずに一人で行くの。

いいじゃない、それで。

第19話

「みんな、よく聞きなさい！1回しか言わないからちゃんと聞きなさいよ。何があっても聞き取るのよ」

あれから2日後。

つまりは、明日あたしは養子に行く。
この学校で過ごす最後の日。

もうすぐ6時。

皆が帰りの用意を始めたころ、あたしは話を切り出した。

みんなをこちらに注目させる。

よし、全員こっち見たな。

ちゃんと言うことにした。

みんなにちゃんと言うことにしたの。
転校のこと。

言わずに行くなんてあたしらしくない。
みんなだってきつと怒る。

だから、言っておくことにしたの。
みんな驚くだろうな。

「あたし、転校することになったの」

シーンと静まり返った音楽室。

あたしは余裕を見せつけるかのように話します。

「だから、女王の座は降りさせてもらう」

目を見開いてあたしを見てる。

煙草の灰をポロツと落とす不良たち。

ほんと面白いわね。

「あたしが次の女王を決めさせてもらう」

誰も、何も言わない。

あたしの言葉を待っている。

あたしにはそう見えるから話を続ける。

「次の女王は……」

あたしはあの子を指差した。

すつごく驚いた顔をしている。

驚いた、なんてレベルじゃない。

そりゃそうよね。

あたしがいきなり話を進めていくんだもの。

だけど、事実なのよ。

驚かないでちょうだい。

あたし、もう決めちゃったんだから。

何を言われても、戻る気はないんだから。

だから、あなたもいつもみたいにかわいく笑いなさいよ。
最後にあなたの笑顔を見せてよ。

それだけであたしは頑張れるんだから。

第20話

「百合、あんたが女王よ」

もう一度言っ。

百合は固まっている。

ピクリとも動かない。

ほかの子も同じ。みーんな全然動かない。

そんなにびっくりしたんだ。

「そういうことだから。あたしは明日から学校来ないからね。ちゃんと百合の言うこと聞くのよ。じゃ、さようなら」

早口でまくしたてるように言って、音楽室を出た。

ダメだ。ここにいちやいけない気がする。さっきまで全然大丈夫だったのに。

なんだか、苦しい。すごく、苦しい。

何で？これでいいはずなのに。昨日練習したとおりに言えたのに。なのに何で？わかんないよ。

早く、早くここから離れないと。

理由は分からない。だけど、早くいかなきゃ。

ここにいたらだめ。あたしの直感が告げている。

頭で警報が鳴っている。早く、早くいかなきゃ。

ここから遠ざからないと。

あたしの何かがおかしくなっちゃっ。だから……。

「千影様！」

百合の声が遠くに聞こえた。追いかけてきたんだ。でもあたしは振り返らない。無視を決め込む。振り向いたらだめ。帰らないと。あたしのいる場所はここにはないんだから。

「待ってください！千影様！」

待ってって言われて待つ奴なんていないわよ。待つわけじゃないのよ。あたし、ここにいたくない。

でも、足音は近づいてくる。どんどん、近づいてくる。百合は走ってくる。猛スピードで近づいてくる。

逃げればよかった。あたしも走ればよかった。

だけど、それはとてもいけないことのように思えて。立ち止まる。でも、振り向かない。前を見たまま立ち止まる。

「千影様！」

後ろからガバツと抱きつかれる。

ぎゅうつと強くあたしを押しつぶすかのように力を込める。

痛いよ。痛いよ、百合。

「千影様。嘘ですよね？あれは冗談ですよね！？」

大声であたしに問いかける。

答えぐらいわかってるくせに。もう一度言ってあげる。よく、聞きなさい。

「嘘なわけではないでしょ。あたしはこの街を出ていく。だから百合、さようなら」

一気に力が緩む。それでも百合は離さない。

「百合は信じません！千影様は嘘をついているんです！」
また腕に力が入る。だから、痛いってば。

「百合」

あたしは静かに百合の手を離し、今度はあたしが百合を抱きしめた。
暖かい。百合は暖かいね。あたしはこんなにも冷たい。心が冷たい。
いつも付いてきてくれたのに。なのに、こんなことしかしてあげられなかった。

あたし、バカだよ。百合の1年ちよつとを 無茶苦茶にした。
無茶苦茶になったのはあたしの人生だけじゃない。百合も同じ。
あたし、百合を傷つけた。あたしばかり、かわいそぶって。
世界一のバカだよ。

「あたしのこと、好き？」

「もちろんです！百合は千影様のこと、大好きです！」

すぐに返事をしてくれる。当り前のように言う百合。

こんな「当り前」を作ってしまったのはまぎれもなくあたし。
悪いのはあたし。百合は全然悪くない。だから、そんな悲しそうな顔しないで。

全部、あたしが悪いの。

「あたしのこと、好きでいてくれるなら。慕ってくれるなら。

……あたしのこと、追わないで」

自分でも信じられないくらい鋭い声を出していた。針のように尖った声。

触ると痛い、薔薇のとげのよう。

「百合があたしのためにできること。それはあたしを笑って見送ることよ」

酷なことぐらい、わかってる。でも、本当のことなの。

あたしが一番求めているのはそれなの。お願い、わかって。

「寂しくなったらあたしに電話をかければいい。あたし、出るから。百合の話聞いてあげるから。……だからあたしを追わないで」

ほかのことなら何でもするから。できることなら何でもやるから。

「それに、あたしはもう「千影様」じゃない。日向よ」

その名前はあたしに必要な。あたしが持つべき名じゃない。

「あたしからのプレゼント。あなたの名前は「雪姫^{ゆきひめ}」。雪姫よ」

あたしにできるのはそれぐらい。あたしが名前をあげる。受け取ってほしいの。あたしのわがママを聞いてほしい。

「もう1つ。月曜日、引き出しの中をのぞいてごらんさい」

音楽準備室にある机の引出し。あそこには不良たち1人1人にあてた手紙がある。

昨日、こっそり入れておいた。女王のあなたなら、どこの引出しか分かるはずよ。

だから、見つけてみんなに渡してあげて。あたしの気持ちだから。

「もう、話すことは終わり。もう何にも残ってない。最後に言っておきたいのは……」

一旦ことばを切る。あたしが伝えたいこと。
転校が決まってからずっと百合に伝えなかったこと。

「……ごめんね。こんなあたしを許して。本当にごめんね……」

百合の頬に涙が伝うのがちらりと見えた。

それを確認したあたしは、百合を力強く突き飛ばした。

よろける百合。あたしは走り出す。

最後の最後までごめん、百合。ごめん、ごめん、ごめん。
謝りたい。謝りたいこといっぱいある。

ごめんって何度言っても足りないくらいある。

泣き崩れる百合。

あたしにはゆりを慰めることはできない。

ごめん、百合。

ありがとう、百合。

さようなら、百合。

第20話（後書き）

なんだか今回だけすごく長くなってしまいました。

ごめんなさい！

今まで読んでくださった皆様！

改めて、お礼を申し上げます。

こんな葵ですが、頑張りますので応援してください。

第21話

「これで全部かな？」

幸弘叔父さんはあたしを振り返った。

目の前にはすごく高そうな車。そこにあたしの荷物を積み込んでいく。

結構あつたけど、どんどん中に入っていく。この車、四次元ポケット？

はじめは、持っていく予定の荷物は少なかった。

迷惑になつたら嫌だし。捨てようと思っていたのもあつた。

そしたら渡辺さんが「別にいいよ。いっぱい持っておいで」

って言うてくれたから、それに甘えることにした。そしたら荷物は段ボール5個分！自分でもびっくりした。ぬいぐるみとかが多いからね。

かさばるんだろうな。捨てられなくて困ったし、よかった。

「幸弘叔父さん」

「何だい？」

やわらかい笑みを浮かべながら聞き返す幸弘叔父さん。

改めて思ったんだけど、童顔だなあ。子供みたいよ。幸弘叔父さんらしいけど。

「また、幸弘叔父さん特製の卵焼き、食べに来ていいかな？」

あたしがどんなに頑張ってもマネすることはできないあの味。あたしの好物。

あれが食べられなくなるのは本当にショックなのよね。また、食べたいあの卵焼き。

きつとどんな高級店でも作れない、幸弘叔父さんの卵焼き。

「もちろん。いつでもおいで」

「うん、落ち着いたら食べにくる！」

楽しみだなあ。早く食べたいよ。ていうか、お弁当箱の中身、全部それでもいいよ。

絶対に飽きない！変な自信まである。

「そろそろ行こうか、日向ちゃん」

「はい」

渡辺さんが車に乗り込んだ。あたしもそれに続く。

幸弘叔父さんが手を大きく振ってくれている。あたしも振り返す。

ついに車が発進した。

見えなくなる家。

見えなくなるいつもの景色。

見えなくなる幸弘叔父さん。

もう戻らない、あたしの日常。

バイバイ。

「さあ、ついたよ」

運転手さんに車のドアを開けてもらって外に出る。

専属の運転手さんなのかな？たぶんそうだよね。ドラマとかでよく見るじゃん。

かつこいいなー。

「呼び方、日向ちゃんでもいいかな？ひなちゃん、でもいいけど」

「日向ちゃん、でいいです」

ひなちゃんなんて呼ばれたら思い出しちゃうじゃん。思い出したくなんかないよ。

だから、日向でいいよ。本当は「ちゃん」もいらなんだけどね。

「あたしはなんて呼べばいいですか？」

やっぱり渡辺さんは駄目だね。

一応、親子になったんだから。その関係は本物じゃなくても親子なんだから。

「お父さん、は呼びづらいだろうしね……。渡辺さんでいいよ。

だけど、パーティーのときはお父さんって呼んでもらえると助かるんだけど……」

「わかりました」

ひえー！パーティーなんかあるんだ。あたしも参加しないといけないんだよね。

ドレスとか着るの？！無理無理！絶対似合わない！

「ようこそ、渡辺家へ！」

渡辺さんはとてつもなく大きくて豪華な扉を開けた。

あたしは一歩足を踏み出した。

これで、あたしは本当に渡辺家のオジヨー様になっちゃうんだ。

バイバイ、あたしの平和な日々。

バイバイ、あたしの日常。

バイバイ、みんな。

真っ赤な絨毯が敷かれたすごく広い廊下をあたしは歩きだした。

第22話

「はじめまして、お嬢様」

「……はじめまして」

どういう状況か説明しよう。

どうしてあたしがこんな広い部屋の中で正座しているか。
それは、少し前にさかのぼる。

「日向ちゃん。日向ちゃんにも一応マナーとか勉強してもらわないといけないから専属の者をつけさせてもらいたいんだけど、いいかな？」

リビングで、ていうかりビングっていうレベルじゃないくらい広いリビングで

お茶を入れてもらってくつろいでいるとき、渡辺さんは尋ねてきた。やっぱり渡辺さんはひよろつとしてる。こんな豪邸は似合わないかも。

失礼だから口には出さないけどね。

「はい。別にいいですけど。どんな人なんですか？」

気になるのは、その専属の者って人。

厳しいおばさんとかだったら嫌だなあ。

こう、ムチでビシビシ叩かれてさ。痣だらけになっちゃっよ！

「紹介したいから、部屋を移動しようか。そうだね……」。

日向ちゃんのお部屋にしようか。ついでに部屋も見せたかったしね」

あたしの部屋かー。そういえば荷物は運び込まれたらしいから、ぬいぐるみの

セッティングもしなきゃ。ああ、あと風水グッズも。

あたし、占いは信じる派なんだよね。風水とかすごく気にしてる。ちなみに、部屋もその影響のため、方角を注文しておいた。

嫌な顔せず変更してくれた渡辺さん。すっごくいい人だと思う。

「ここだよ。どうぞ」

渡辺さんがドアを開けてくれる。あたしは中に入った。

ペコリ。

お辞儀をしている2人の人が奥にいる。

2人とも綺麗なお辞儀。45度ぴったしだよ。角度測りたいんですけど。

でっかいやつ特注してもらってさ。

「日向ちゃん、こっち座って」

椅子を引いて示しているから、あたしはその、一目でわかるほど高そうな椅子に座った。うわ、すわり心地よさすぎ！
こんないい椅子見たことないんですけど。ホントいい。

ああ、そんなことよりこの人たちのほうが重要よ！

そこにいるのは顔のそっくりな女の子2人。

1人はふわふわの髪をツインテールにしている、シュシュをつけている。

目がくりっとしていて、これまた美少女。それにしても、髪長いね。ツインテールってことは、髪を20センチほどあげてるわけでしょう。なのに腰ぐらいまである。

もう1人は、髪をお団子にした子。

さっきのことおんなじ顔だから、言うまでもなく美人。

横髪だけを垂らしている。中華風な感じだ。こっちの子も腰ぐらいまでの髪。

すっきりとした顔。すっと通った鼻。クールな女の子。

あたしと年も変わらなさそう。

で、あたしが一番驚いたこと。

それはね、この2人がメイド服着ていること。

ちよっと！メイド服よ！着ている人はじめてみたんだけど！

なんか妙に感動してきたんだけど！

だってさ、メイド服だよ？普通着ている人なんていないよ。

しかもこれ、コスプレとかじゃないと思う。たぶん、本物のメイドさん。

こんな家だもん、メイドがいてもそれほど不思議じゃない。でも、メイド服にはびっくりだよ！

「ははは、はじめまして！」

あたしは椅子の上でピシッと正座した。

そうして、今の状況が完成したわけだ。

第23話

「私はそろそろ仕事をしないと……。すまないけど日向ちゃんを頼むよ」

渡辺さんは腕時計を見ると急にあわてだして部屋を飛び出して行った。

めちゃくちゃ速かった。マツハだった。嵐みたいな人だよ。

ちよつと待て。

……あたし、取り残されちゃった？

誰かも知らない人2人の部屋に取り残されちゃったって？

おい！やめろー！気まずいだろー！どうやってこの状況を打破しろって？！

ドラクエのラスボスなみに難しいわ！あれ、何でドラクエ？

「あああ、あの」

「面白い人ですねー。自己紹介とかしませんか？」

テンパッてるあたしを普通に受け流したあんたが面白いよ。

自己紹介！これならこの気まずーい空気を何とかできる！

「はいはい。やりましょやりましょ」

なぜか2回繰り返すあたし。もー！

「じゃあ、私からしますねー。まずは名前ですね」

そこら辺にあった高級椅子の上に立つふわふわツインテールの女の子。

高級そうな椅子の上に立つだなんて！何者だ？！
そもそもどうして高級な椅子がそこら辺にあるの？おかしくない？

「わたし、日比野ありす《ひびのありす》って言います。次、ありさね。」

中華風お団子の女の子を椅子の上に立たせる。
ていうか、もう名前言っちゃってますよ。

「……日比野ありさ《ひびのありさ》」

あった時から思ってたんだけど、ありさは無口なんだね。
だって、声も小さめだし、ありすみたい元気少女って感じじゃないし。

「同じ名字？もしかして双子？顔も名前も似てるし」

考えたことはすぐに口に出す。あたしの性格上そうしかできない。
秘密は守るけどね！。本当に？って疑われるけど。

「はい、そうです」

につこりと笑うありす。さっきからすごくにこにこしてる。
嬉しいことでもあったのかな？

反対にありさは笑ってない。まあ、たく笑ってない。
無口な面でもそうだけど、おとなしいのかも。あたしと正反対だ。

「次はあたしだね」

あたしは自分を指差す。2人ともやったんだから必然的にあたしの番。

高級椅子には立てない……。なにか代用品を……。

お、いいの見つけた。

「お、お嬢様！危ないです！」

あたしがその代用品に立つたら、ありすはすごい剣幕で降ろしかかった。

えー、いいと思ったんだけどなあ。

「段ボールの上になんて立たないでください！危ないです！」

あたしの見つけた代用品とは段ボールだ。ありすに却下されたけど。ありさ、後ろの方でぼそつと一言。

「……面白い人」

ありさにも面白い人発言されちゃいました。

ありさに言われると否定できない……。なんでもできちゃいそうだし。

勉強とか得意そう。あ、スポーツもできたりして。

「こんな高そうな椅子の上になんか立てないよ」

「なら床でいいですよ！」

二度と段ボールの上で自己紹介をしません、という変な約束をさせられた。

もうしないってば！そんな約束させられてたら身がもたないわよ！

「えーと、あたしは、くすの……、渡辺日向」

……あたしはもう楠木日向じゃなかったんだった。

あたしは渡辺日向。渡辺、だ。

「別にお嬢様なんて呼ばなくてもいいよ。2人とも歳は？」

「14歳」

「……14歳」

2人できれいにハモツた。さすがは双子。息ぴったり。

「あたしも14歳。おんなじ歳なんだから敬語なんて必要ないよ」

あたし、はつきり言ってお嬢様なんてガラじゃないしね。

この2人のほうがお嬢様らしい。あたしがぴらぴらしたドレス似合うと思うか？！

そりゃあ、似合ってたら嬉しいけどさ。おーほっほなんていてみたいけどさ！

無理でしょ。どう考えてもやっちゃいけないでしょ！

「敬語はやめることはできませんよ」

「……私たちは雇われの身」

でもさ。あたしはお嬢様なんかじゃないよ。

「日向お嬢様なんてどうですか？」

「……これなら大丈夫」

「はあ。まあいいわ。ごーかく」
お嬢様、よりはいいしね。親近感がわく。

「じゃ、自己紹介の続きやろー！」

知っておきたい。あたしの「専属の者」の2人について。
これから長い付き合いになるから。だから、いっぱい知っておきたい。

2人とは、主従関係なんかじゃなくて、友達として付き合いたいか
ら。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9852z/>

あたしは天下のオジヨージ様！

2012年1月8日20時52分発行